

# 箱崎 52

— 箱崎遺跡第70次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1342集

2018

福岡市教育委員会



HAKO ZAKI  
箱崎 52

— 箱崎遺跡第70次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1342集



遺跡略号 HKZ-70  
調査番号 1405

2018

福岡市教育委員会



## 序

福岡市には北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸と人、物、文化の交流を絶え間なく続けてきた歴史があります。この地の利を活かした人々の生活を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれて明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものが多く、学術研究上においても重要視されているところです。

本調査では中世の国際貿易都市として栄えた博多と並ぶ箱崎の様相が知られる遺構、遺物が数多く発見されました。特に15世紀代以降の中世の終わりにかけての都市の変化が見えはじめてきたことは重要です。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく多様な開発で消滅する埋蔵文化財を将来に残していく記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで関係者の皆様のご理解とご協力を賜りましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

平成30年3月26日

福岡市教育委員会  
教育長 星子明夫

## 例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成26年度に共同住宅建設に伴い、福岡市東区箱崎1丁目2045番5、2045番6地内で実施した箱崎遺跡第70次調査報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は民間受託事業および国庫補助事業として実施した。
3. 調査は荒牧宏行が担当し、遺構実測図は荒牧の他、藤野が作成した。
4. 本書に掲載した遺構、遺物写真は荒牧が撮影した。
5. 本書に掲載した遺物実測図は、荒牧、済書は桶口久美子、荒牧が行った。
6. 本文は荒牧が執筆した。
7. 本書掲載の実測図、写真、遺物のはか調査で得られた総ての資料類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管され、活用されていく予定である。

## 凡 例

1. 本書に用いた方位・座標は世界測地系による。
2. 掲載した遺物の番号は土器、石器、金属器等に分けて通し番号とした。
3. 遺構の種類を示す略号として掘立柱建物跡をSB、竪穴住居跡をSC、土壙をSK、溝をSD、柱穴をSP、性格不明のものをSXとした。
4. 報文中の輸入陶磁器の説明には『太宰府条坊跡X V』太宰府市の文化財 第49集 2000 太宰府市教育委員会、山本信夫・山村信榮「中世食器の地域性〔10〕九州・南西諸島」国立歴史民俗博物館研究報告第71集1997の編年・分類を用いた。

調査基本情報一覧

遺跡名	箱崎遺跡	調査次数	70次	調査略号	HKZ-70
調査番号	1405	分布地図福番号	034	遺跡番号	2639
申請地面積	249m <sup>2</sup>	調査対象面積	150m <sup>2</sup>	調査面積	116m <sup>2</sup>
調査期間	平成26(2014)年4月14日～平成26年6月13日	事前審査番号	25-2-1167		
調査地	福岡市東区箱崎1丁目2045番5、2045番6				

## I はじめに

### 1. 調査に至る経過

福岡市教育委員会は同市東区箱崎1丁目2045番5、2045番6における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成26年2月6日付で受理した。これを受けた文化財部埋蔵文化財審査課は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれることから確認調査を同年2月24日に実施した。確認調査では現地表面下30~50cmで遺構が確認されたことから遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できることから建物部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意し、平成26年4月7日付で事業者（個人）を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託を締結した。統いてこの契約に従い発掘調査を同年4月14日から6月13日まで実施し、平成28年度、29年度に資料整理および報告書作成を行うことになった。

### 2. 調査の組織

平成26年度の発掘調査、および28年度、29年度の資料整理、報告を以下の組織体制で行った。

**【調査主体】** 福岡市教育委員会

(平成26年度 発掘調査)

**【調査総括】** 経済観光文化局 文化財部埋蔵文化財調査課 課長 常松幹雄

同課調査第2係長 櫻本義嗣

**【庶務】** 埋蔵文化財審査課 管理係長 内山広司 管理係 川村啓子

**【事前審査】** 埋蔵文化財審査課 事前審査係長 佐藤一郎 主任文化財主事 池田祐司  
文化財主事 板倉有大

**【調査担当】** 埋蔵文化財調査課 主任文化財主事 荒牧宏行

(平成28年度、29年度 整理・報告)

**【整理・報告総括】** 経済観光文化局 文化財部埋蔵文化財課 課長 常松幹雄

同課調査第2係長 加藤隆也（28年度）、大塚紀宜（29年度）

**【庶務】** 埋蔵文化財課事前審査係長 大塚紀宜（28年度） 管理係 入江よう子（28年度）  
文化財保護課管理調整係 松尾智仁（29年度）

**【事前審査】** 埋蔵文化財審査課 事前審査係長 佐藤一郎（28年度） 本田浩二郎（29年度）  
主任文化財主事 池田祐司 文化財主事 清金良太

**【整理・報告担当】** 埋蔵文化財課 主任文化財主事 荒牧宏行

## II 位置と環境

### 1. 地形

箱崎遺跡は博多湾に面した砂丘上に立地する。周辺には同じく、砂丘上に博多遺跡群、吉塚本町遺跡、堅粕遺跡等が立地し、浜堤列が形成されていたことを示す。

箱崎遺跡の範囲は南北1,050m、東西550mに及ぶ。西側には中世の海岸線近くとみられる元寇防壁は宮殿から西側に460m離れ、東側は宇美川で区切られ、さらにラグーンが広がる。

砂丘の頂部は宮殿周辺にみられ、砂丘列の尾根が現在の大学通りに沿って伸びる。調査地点は宮殿の北東部に位置し、砂丘は北東方向に傾斜しているものとみられる。



Fig. 1 箱崎遺跡位置図 (1/25,000)

### 2. 既往の調査成果から

箱崎遺跡の遺構、遺物が増加するのは宮殿が創建された10世紀以降である。既往の調査では宮殿の北東部と南側で10~11世紀代の大宰府と同じ型式の瓦当を含む瓦片や土器等が出土している。今後、遺構が少ないと考えられる宮殿や神宮寺境内の範囲も含め検討していく必要がある。

11世紀後半以降は、博多同様に遺構、遺物等が急激に増加し、活発な貿易が行われ始めたことを示す。輸入陶磁器等は14世紀初頭頃までの時期に多くをみる。また、12世紀代の中国系の瓦当も上記の大宰府系の瓦当と同じく宮殿の北東部や南側から出土している。

15世紀以降は宮殿周辺においては、この中世包含層の上面で検出される。浅く遺構、遺物が検出され、上部が後世に削平され整地されていることを示す。既往の一部の調査では中世包含層を除去したことから特に15世紀以降を失っている。遺構の層位や井戸の配置等から15世紀前後に土地の改変が行われた可能性がある。

## III 調査の記録

### 1. 調査の方法

調査範囲は敷地の中央部を占める建物建設予定地である。廃土を敷地内で処理していくために、調査予定地を3分割し、東側から順次、調査を行った。その順序から東側調査区をI区とし、III区までの名称を図面、遺物出土地点の名称に用いた。

遺構面は次項で説明するように3~4面を設定した。

### 2. 基本層序

現地表面は標高4.4mの平坦地となっている。最上層に厚さ40cm程度の現代整地層が堆積してい

る。この層は青灰色を呈し、礫、クラッシャー等を含む。次に明褐色砂質土が厚さ10cm程度堆積する。詳細な時期は不明であるが、近世以降である。その直下で灰白色粘土を下底に貼った遺構が検出される。(Fig.4 A-A' 7層) この面を第1面とした。第1面直下の層は均質な黒灰色砂質土の②層 (Fig.4 B-B' 12層) からなり、厚さ約60cmを測る。東側I区ではこの②層の上層に整地層と考えられる灰白色粘土混じりの褐色砂質土①層が堆積し、石組み遺構のSX01、02がこれを切って掘りこまれている。第2面は中世包含層(整地層)である②層中から検出されたものとした。SX04のような土師皿集積遺構などが含まれる。しかし、面としては捉えていない。

第3面はこの黒色砂質土②層を除去した明褐色砂層 (Fig.4 A-A' 18層、B-B' 13層) 上面である。この面では遺構を明確に識別することができる。第3面以下の明褐色砂層は厚さ約20cm前後で、この層を除去すると地山の砂丘砂である明黄灰色砂層 (Fig.4 A-A' 21層、B-B' 14層) が検出され、第4面とした。地山標高は東側で標高3.3m、西側で3.0mを測り、西側へ下降している。

なお、既往の調査では中世整地層②層までを除去し、第3面から始めた事例がある。後述のように、中世後半期の遺構と中世の重要な遺物を失うことになりかねない。

### 3. 遺構と遺物

#### (1) 第1～2面

SX01

調査区東側で検出された石室である。主軸方位をN-23°-Eにとり、ほぼ現在の町割の方向に近い。石室の西側には方形プランとみられる灰白色の薄い粘土層



Fig.2 箱崎遺跡調査地点図 (1/5,000)

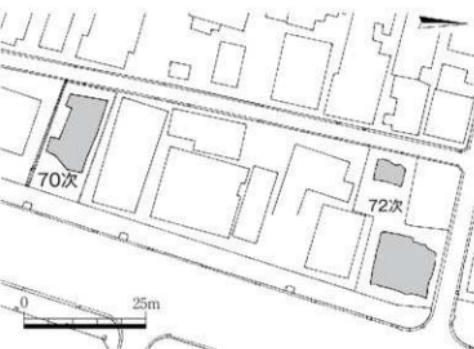


Fig.3 調査範囲図 (1/1,000)

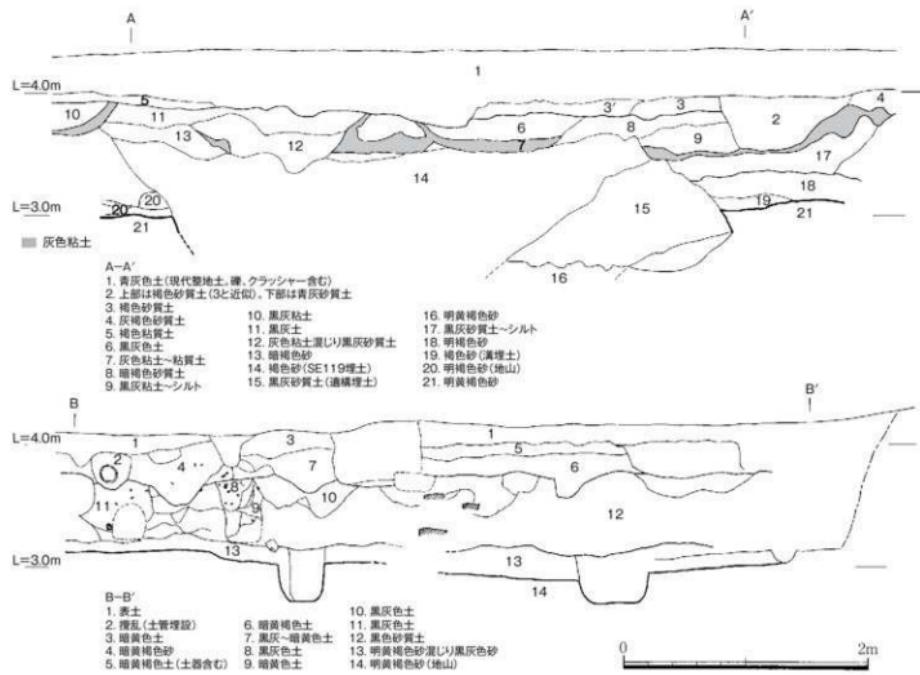


Fig.4 調査区土層図（北壁、西壁 1/40）

SX41が検出され、これを切って石室が構築されている。また、SX01、02周辺のI区とした部分には西側の1面黒色土上層に黄褐色の粘質土からなる整地土が堆積し、この面を1面とした。

石室は南側に開口する。古墳の横穴式石室に類似し、狭道状の短い通路から進入し、玄門状の石室入り口には敷石3個が置かれている。奥幅73cm、前幅65cm、右(東)側壁長89cm、左(西)側壁長97cm、主軸長88cmを測る。石積の高さは底面から約50cm遺存し、5~6段分を積んでいる。石材は10~15cm大の自然礫を多用し、1~2段目に較的大きめの石材を用い、特に左側壁の1段目には40cm大の横長の石材を据えている。

仕切石には35cm大の平石3個を設置しているが、中央の敷石の高さが低い。仕切石から開口部にかけて基底部は傾斜し、側壁の積石基底面も立ち上がりしていく。仕切石の通路幅は47cm、開口部付近では約25cmに狹まる。この通路の内部にも石材が入っていたが、閉塞石か崩落したものか明確にはできなかった。

石室掘方は長軸長182cm、短軸長125cmを測る長方形プランである。中央部にかけて深くなり最深部は検出面から62cm、石室基底面から26cmを測る。基底面には下層に砂混じり、上層に暗灰色の粘質土で整地されていた。

出土遺物(Fig.11 1, 2)の1は越州窯系青磁碗である。全面に黄褐色を呈した釉が施されている。内底の体部との境に沈線を有す。高台内に粘土目跡が残る。2は須恵器壺で前代の遺物の混入とみられる。

SX01の時期を示す遺物は出土していないが、層位、切り合い関係から中世末以降と考えられる。

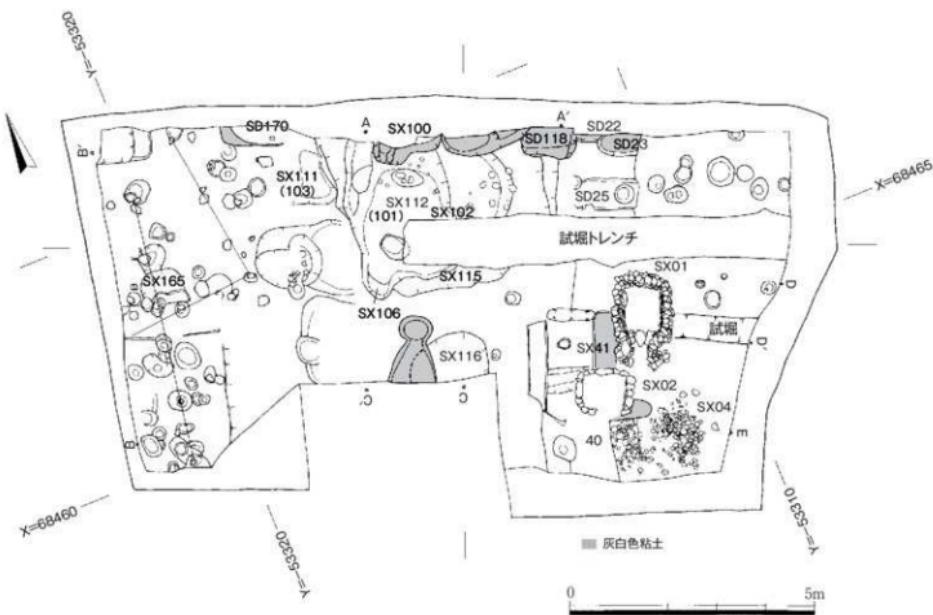


Fig.5 遺構全体図（1面、2面）

### SX02

SX01の南西部に隣接して構築された石室である。南壁（前壁）は消滅しているが、SX01と同方向に開口していたと考えられる。

石室の内法は奥壁幅87cm、前幅77cm、右側壁長70cm、左側壁長63cmを測る横長のプランである。石材は20~30cm大の礫を多用し、奥壁中央と左側壁中央に大きめの石材を据えている。3段目まで遺存するが、最下の石材を据えた根切の深さは浅い。

出土遺物（Fig.11 7）7は花本文の中国系瓦である。12世紀代とみられるが、構築時期を示していない。SX01同様に中世末以降とみられる。

### SX112 (101)

調査区中央部（II区）の北辺際で検出された。プランは明瞭ではなく、西側に広がっていた可能性があるが、下部のSE119によって沈み込み、SE119とほぼ重なったとみられる。埋土は灰白色粘土混じりの明黄灰褐色土である。1面~2面に堆積した、黒色砂質土の上層で層位的にI区のSX01、02周辺に広がっていた整地層に相当する。

出土遺物（Fig.11 3~6）3の青磁皿は花弁状に口縁を刻み、内面にはヘラ描きがみられる。4は青磁である。高台を含め施釉し、内面は輪状に焼き取る。淡緑色を呈す。5の粉青沙器は高台置付以外は全面に施釉している。6は上部検出時に出土した備前摺鉢であるが、間壁編年のIVB期に相当し、15世紀代と考えられる。

105 出土遺物8の青磁碗は高台置付は釉を拭き取り、目跡を有す。他は施釉している。

### 灰白色粘土が基底に貼られた遺構

現在の町割りに沿った主軸方位の土壤ないし溝状の遺構である。底面に灰白色的粘土が貼られ、内

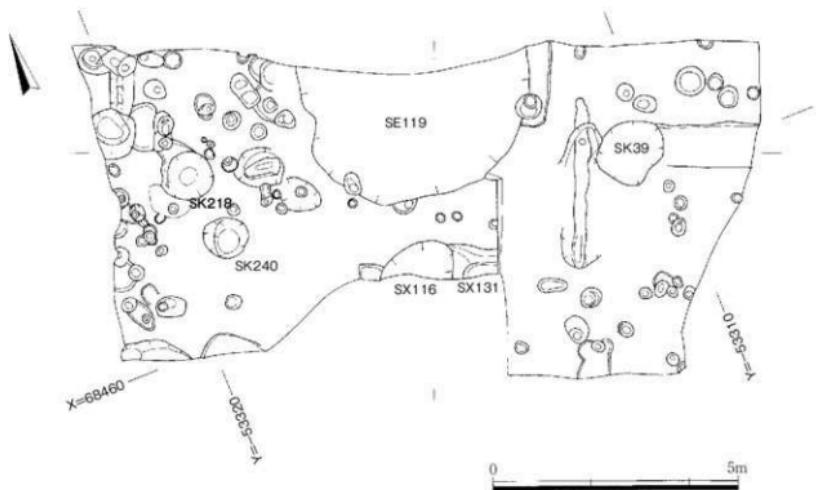


Fig.6 遺構全体図（3面）

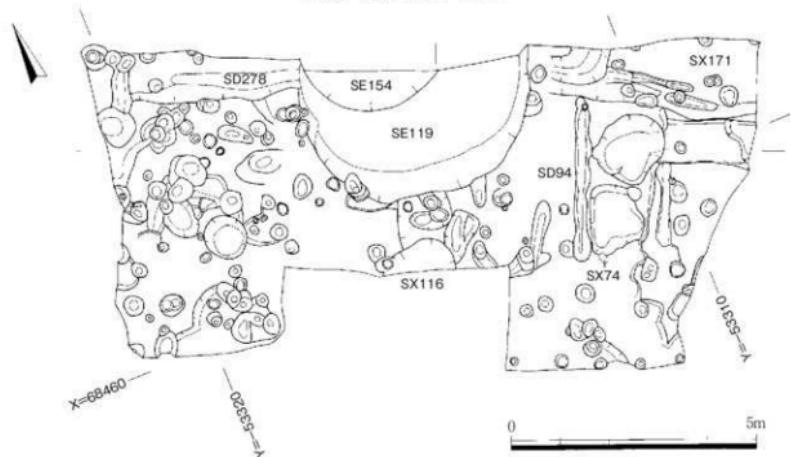


Fig.7 遺構全体図（4面）

部の埋土中にも崩れた灰白色粘土が混入している。調査区壁面の土層から近世以降とみられる上層褐色土の直下から粘土が検出される。

SD23, 22, 118, 500, 100, 170

調査区北界で連続した溝状の遺構である。Fig.4 A-A' の8、11層以下より基底に貼られた粘土が検出された。調査区外に延長しているので、形状が不明であるが、船底状の小さな土壤が切りあいながら、ほぼ同じ主軸上に連続している。出土遺物は細片のみで詳細な時期は不明であるがSD118出土の69土師質鉢は直口をなし、16世紀代に降る可能性がある。

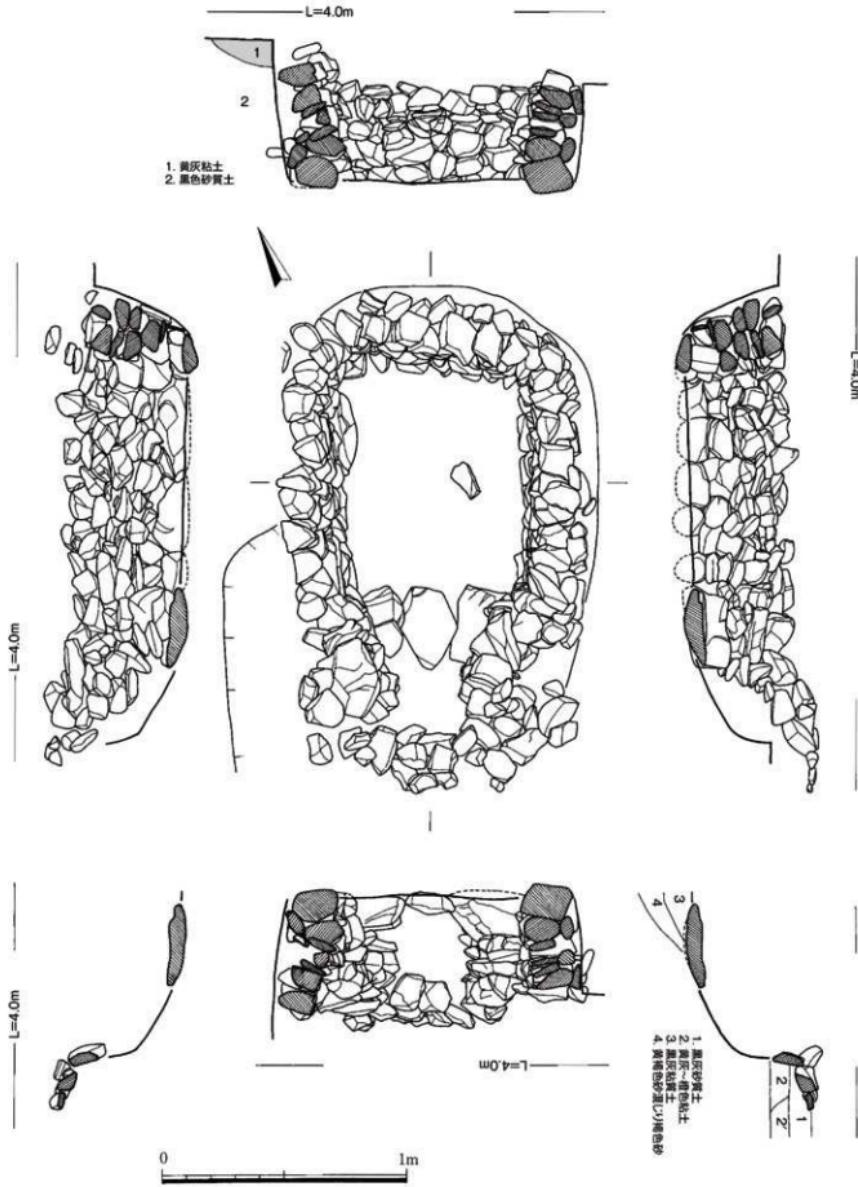


Fig. 8 SX01実測図 (1/20)

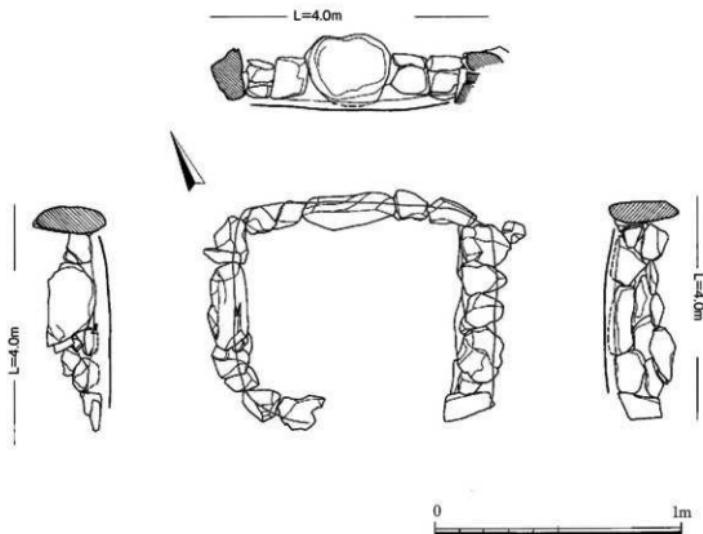


Fig.9 SX02実測図 (1/20)

SX41、501

SX41は西辺が直線的に延長し、溝状のSX501と直行する。SX41はSX01、02に切られている。

SX108

調査区中央で検出された。削平されて、全体が不明瞭であるが、他と同じ主軸方位とみられる。  
(第1面～第2面)

溝

SD25

調査区北東部で検出された。先述の灰白色粘土を貼った溝と同じレベルで検出され、方向も平行し、現在の町並みとほぼ変わらない。東側は擾乱によって消滅し、延長が140cm程しか検出されなかった。幅64cm、深さ10cmを測る。

出土遺物 (Fig.17 65～68) 65、66は土師器、67は黒色土器である。11世紀後半から12世紀代にかけての時期とみられるが、層位的に造構の時期は降る可能性が高い。68はSD25周辺の黒色包含層のレベルから出土した青磁皿である。おそらく、上部からの掘りこみに入ったもので15世紀代まで降ると思われる。

### 掘立柱建物跡

調査区の西側で根石を据えた柱穴群が検出された。主軸方位は調査地点西側の道路方向に近いN-8°-Eと西側に振れたN-7°-Wである。

柱穴出土遺物 (71～79) 71～73は土師皿である。73は搬入系とみられる。灰白色を呈し、外底はヘラ切りである。内底に螺旋状のナデ痕が残る。72と73は同じ柱穴から出土した。74の土師器碗は山本編年X II期の11世紀後半位か。75は青磁碗、76は土師器の高台付皿、77は土師器壊である。78の瓦当は大宰府分類の666Aに近似する。79は土玉である。

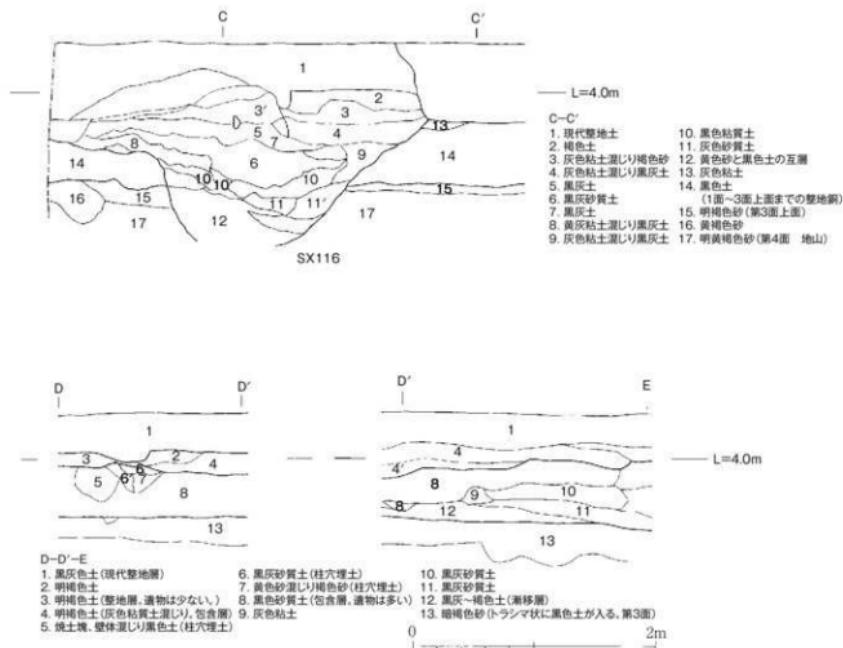


Fig.10 調査区南壁 (SX116)、東壁土層 (1/40)

## 井戸

SE119

調査区北側中央で検出された。上面ではSX101、102、106、115が複合し、方形プランとして識別したが、下部では湾曲したプランになる。埋土は上部では有機質の黒色粘土を含んだ細砂、シルトのラミナが中央に向って落ちていく。また、上部から下底に向って直線的に切り込んだ土層(SE154)が検出されたことから、掘り直されたとみられる。

出土遺物 (Fig.16 45~62) 45、46は糸切り底の土師皿である。油煙が付着する。47は口ハゲの白磁皿、48、49は土師器、50は内黒の黒色土器である。51陶器壺鉢は備前に近く赤褐色を呈し、無釉である。52は禾天目。褐釉の上に黒釉がかかる。53、54は綠釉陶器、58は白磁の落し蓋か。59の青白磁には雷文の型押しがみられる。55の青磁小碗の内面中央は露胎。外底に「二」の墨書を有す。56の白磁皿は内面見込みを輪状に搔き取る。外面に黒油が付着。57~61は龍泉窯系青磁。62の白磁碗は見込みを輪状に搔き取り、体部との境は浅い沈線となる。概ね14世紀初頭に収まると考えるが、21と59は降る可能性がある。

SE154

SE119と重なり、最下近くでプランを検出した。Fig.4の土層図にみられるように上部から掘り込ま

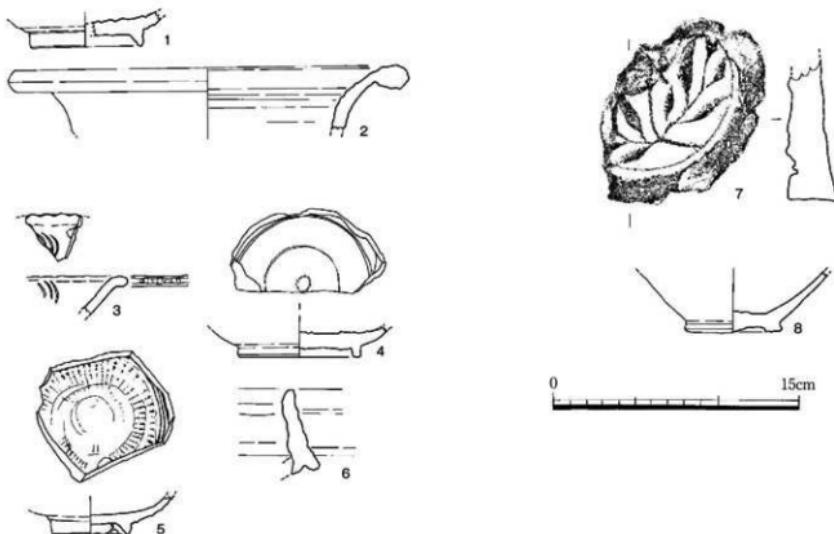


Fig.11 1面遺構出土遺物 (1/3)

れていたことが判る。出土遺物の大半がSE119と混合している。

出土遺物 (63、64) 28は土師皿、29は瓦玉である。

#### SX04

調査区南東隅で検出された。第1面の明褐色砂質土を剥いだ黒褐色砂質土から土師皿、壺を主に集中して破棄された遺構である。

出土遺物 (Fig.13 9~38 Fig.14 39、40) 土師皿118個体以上、土師器壺13個体以上が出土した。土師皿の口径は8.8~9.6cm、壺は15.0~16.4cmに集中する。外底はわずかにヘラ切りがみられ、大半が糸切りである。板目は全てにみられる。26、27は瓦器碗、28~34は白磁碗。35の陶器壺は内外面に緑灰色の施釉がみられる。36の須恵器壺には格子タタキが施されている。37、38は瓦質の鉢（鍋）である。39は東播系の須恵器鉢か。外底に糸切り痕を残し、周縁には粘土の目跡が残り荒れた器面となっている。40の茶釜はこの時期まで遡る古式の可能性がある。体部は肩が張らず、中位の最大径部まで緩やかなカーブで延びる。鍔は短い。時期は総じて12世紀中頃と考えられる。

#### SK39

調査区東側（I区）で検出された。不整形プランを呈し、長軸長140cm、深さ58cmを測る。

出土遺物 (Fig.15 41~44) 41は土師皿、42は東播系須恵器、43の陶器は火熱を受け、発泡している。44は褐釉陶器鉢である。時期は総じて12世紀後半から13世紀代にかけてであろう。

#### SX71 (検出面)

調査区北東隅（I区）の第2面検出面である。

出土遺物 (80~84) 80、81の土師器碗は山本編年のXⅠ期に収まる。82の白磁皿は全面に施釉し、見

込みに目跡が残る。高台は切り込まれている。83の白磁碗は内面に細いヘラ描きと櫛文を施す。見込み中心には径2.2cmの小さい圓線を巡らす。疊付から外底露胎である。84の平瓦は火熱を受け赤変している。総じて11世紀～12世紀代の時期が考えられる。

#### SX113

出土遺物 (85) 85の黒色土器外底には×のヘラ記号を有す。

#### SX116

調査区中央部 (II区) で検出された。出土遺物 (86、87) の土師皿はいずれも糸切り底で12世紀代とみられる。

#### SX165

調査区西側 (III区) で検出された。出土遺物 (88、89) 88は糸切り底の土師器坏、89は陶器壺片である。外面体部と内底に薄く灰緑色の釉が掛かる。内底は火熱による発泡が著しい。

#### SX103

調査区西側 (II～III区) で検出された。方形に近いプランとみられるが、調査区の境となつて完掘していない。

出土遺物 (90、91) 90は鉢III類に含まれ、91は内外面に黒褐釉が施されている。

#### SK218

調査区西側 (III区) の第2面で検出された。一部重複したプランが第1面からも検出されたので、上面からの掘りこみと考えられる。径90から100cmの円形プランを呈し、深さは33cmを測る。出土遺

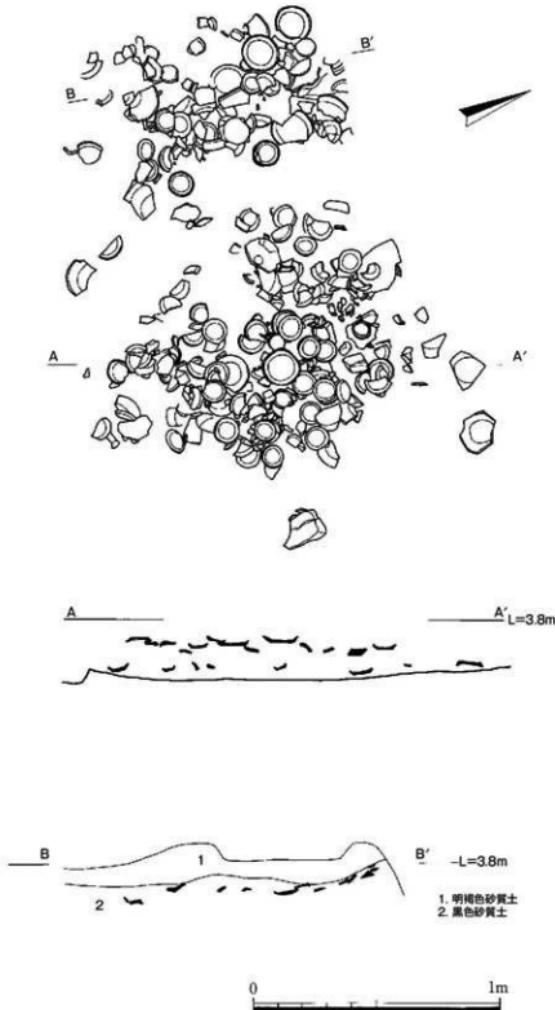


Fig.12 SX04実測図 (1/20)

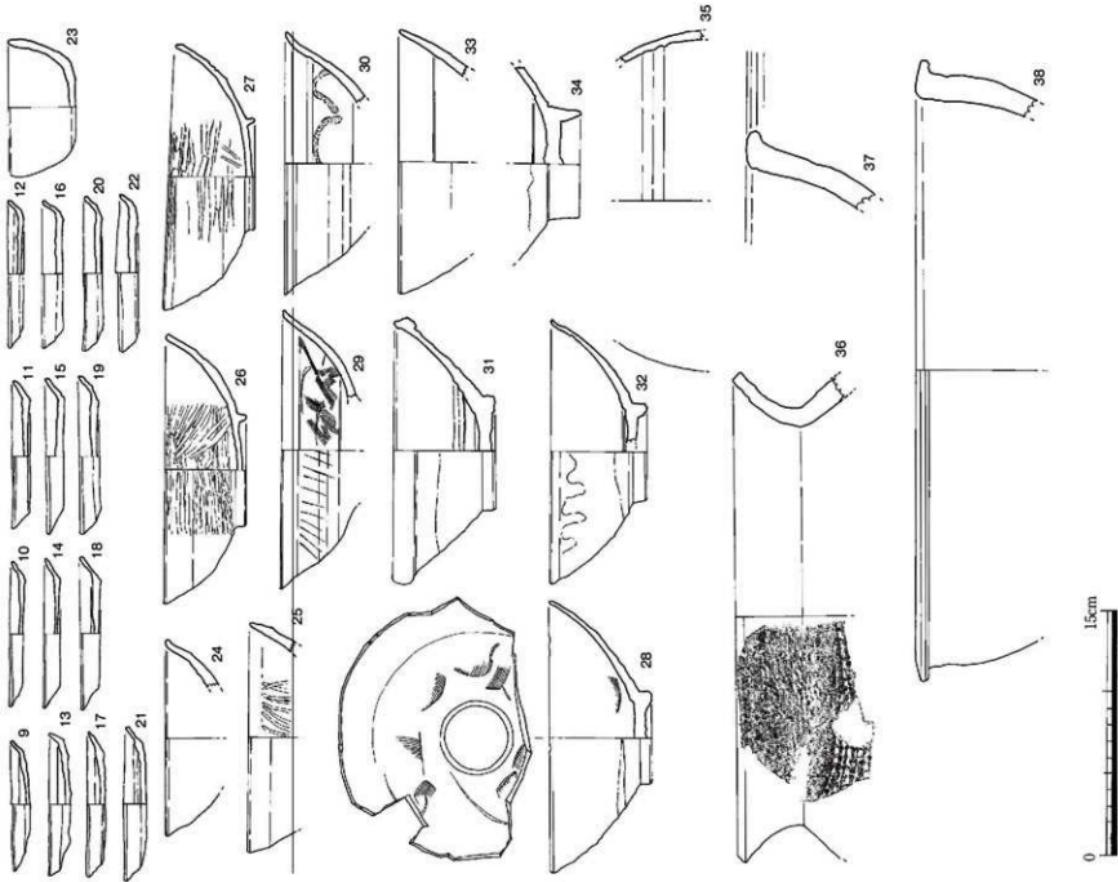


Fig.13 SX04出土遺物実測図 (1/3)

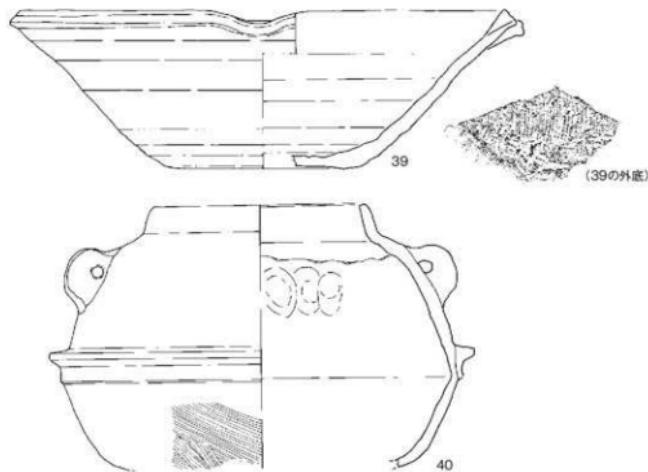


Fig.14 SX04出土遺物実測図2 (1/3)

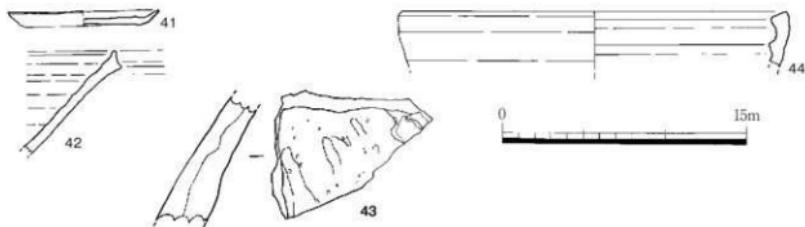


Fig.15 SK39出土遺物実測図 (1/3)

物（84～89）から13世紀代であろう。

#### SK240

SK218に近接して検出された。プランの形状、規模もSK218に近似する。深さ68cmを測る。出土遺物（98）の土師器壺もSK218に近い時期と思われる。

#### (2) 3～4面

#### SD94

調査区東側（I区）で検出されたので、記録では第4面となっている。現在の町並みに近い方向で

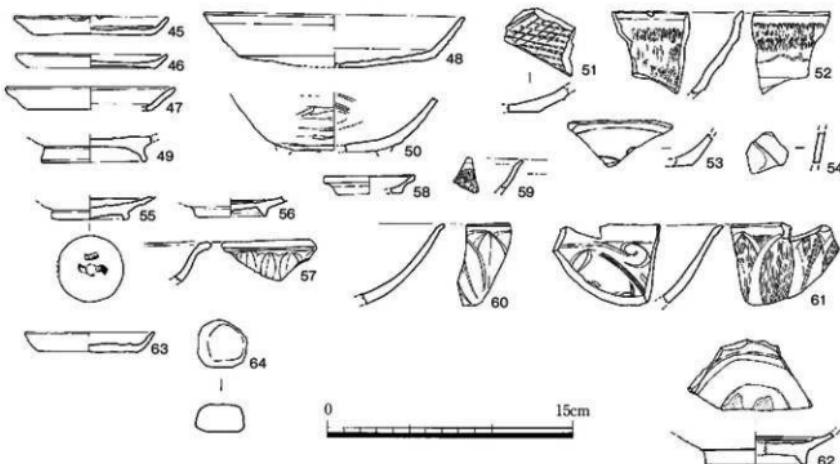


Fig. 16 SE119出土遺物実測図 (1/3)

直線的に延長する。幅30cm、深さ12~17cmを測る。出土遺物は細片のみで70の平瓦片は10世紀後半~11世紀代であろう。

#### SD278

調査区北辺際に沿って延長する。従って、第1面で検出された灰白色粘土を貼った溝状造構とほぼ重複する。幅は約1m、深さは15cmを測る。

#### 掘立柱建物

明確に建物を復元することはできなかったが、柱列は調査区東側（I区）ではSD94に沿った概ね現在の町割り方向に並ぶ。

#### 包含層（整地層）

詳細は基本層序の項で概述したように、層位は大略以下の3層に分けられる。上層から①層として東側のI区で認められた第1面より上層の明灰褐色粘質土、②層として第1面以下の黒色土、③層として第2面以下の明褐色砂層となる。その整地、包含層として取り上げた出土遺物を説明する。

##### ①層出土遺物（112、121~123）

①層出土の112は土師質の鍋である。外面に煤が付着している。15世紀代以降とみられる。121、122は土師器坏、123は青磁小碗である。外面疊付まで施釉している。釉は水色に近く発色する。第1面検出のSX101と近い時期である。

##### ①~②層上部出土遺物（148~151、154、156~158、161）

148は土師器坏、149は瓦質、150は須恵質の鉢である。151は陶器耳壺X I類。無軸で外面火熱を受け赤変している。154は褐釉陶器壺の底部である。156は龍泉窯系青磁碗を打ち搔き、円球状にする。

157は白磁である。釉は青みを帯びた発色。内底は露胎である158は青白磁坏である。内面に枝花が

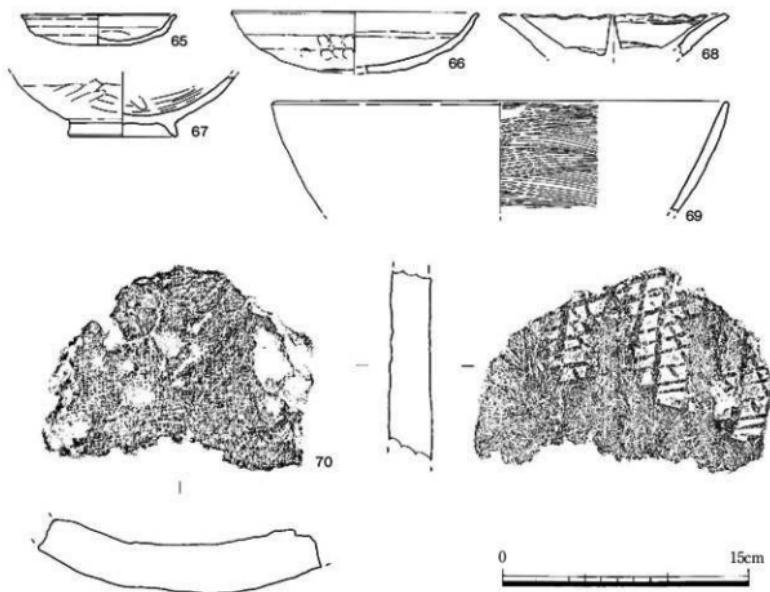


Fig.17 溝 (SD) 出土遺物実測図 (1/3)

型押しされている。釉は水色に発色し、搔き取った口縁端部以外は施釉している。161の白磁碗は見込みは輪状に釉を搔き取り、外底に「十」の墨書を有す。

②層出土遺物 (99~104, 114~120, 124~142, 146, 152, 153, 155, 159, 160, 162~168)

99, 100は土師皿、101, 102は土師器坏、103の青磁碗は緑灰色に発色し、釉にムラがある。104は龍泉窯系のI-2類。114は土師器碗、115は白磁碗V-4b類、116の灰釉陶器壺はオリーブ色に発色した釉が全面に施されている。細かく発泡し、褐色面を露呈している。117は土師器壺である。118は土師皿、119は黒色土器、120は土師器碗である。124は土師皿、125, 126は土師器坏、127, 128, 130は黒

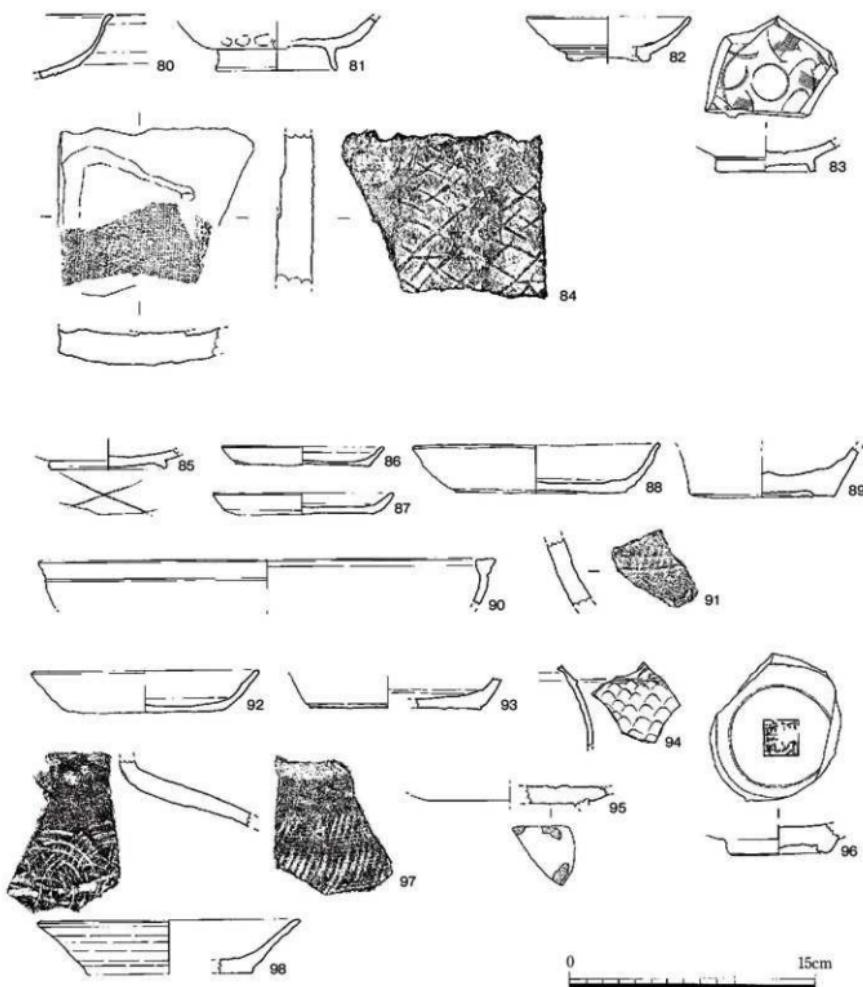


Fig.18 土壌出土遺物実測図（1/3）

色土器、129の長く伸びた高台の土師器坏は10世紀前半まで遡る可能性がある。131～136は土師器、137は須恵器の玉、138は土師質の器台、139は須恵質の直口鉢、140、141は緑釉陶器盤、142は越州窯系青磁皿である。全面に施釉。黄褐色を呈す。高台内に粘土目跡が残る。146は土師器坏、152は青白

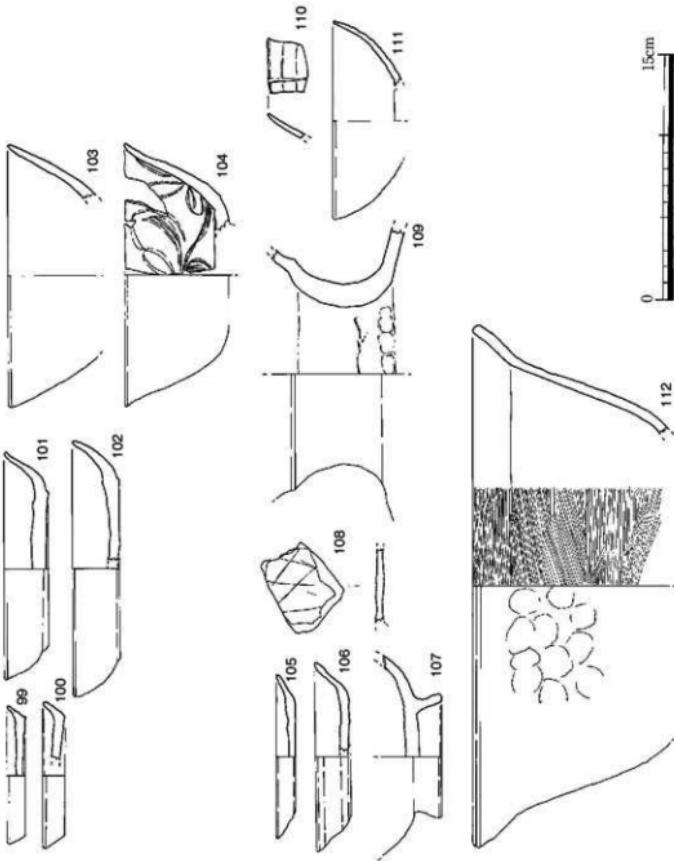


Fig. 19 整地層出土遺物実測図 1 (1/3)

磁合子、153は口ハゲの白磁皿である。155は青磁皿である。壺付蓋胎で赤褐色を呈す。他は全面施釉で灰色をなす。159、160は龍泉窯系青磁碗 II 類、162の青磁皿は壺付以外は全面に施釉。明暦灰色に発色。見込みにヘラ書き文を有す。163は龍泉窯系青磁皿 I - 1c 類である。164、165は土師器、166は瓦玉、167、168の黒色土器は搬入土器である。168の内面の口縁端部には沈線が巡る。桟葉型か。

③層出土遺物 (105~111、143~145)

105~108は土師器である。107はX~XⅠ期に該当し、10世紀まで遡る可能性がある。108は外底にヘラ記号を有す。109は須恵器、110は白磁碗 X 1-5 類。青白色に近く薄い。111の白磁碗は体部に丸みがあり、青白色を呈す。

瓦

169は③層、170は①層、他は②層から出土した。169瓦当は大宰府分類には無い。中心は朱文ではなく、圓線内に「大」の文字が刻まれている可能性がある。なお、「大」の文字瓦は現在まで、大宰府からの出土は無く、箱崎遺跡から出土した平瓦のタキ文の中にみられるのみである。内、外区の朱文

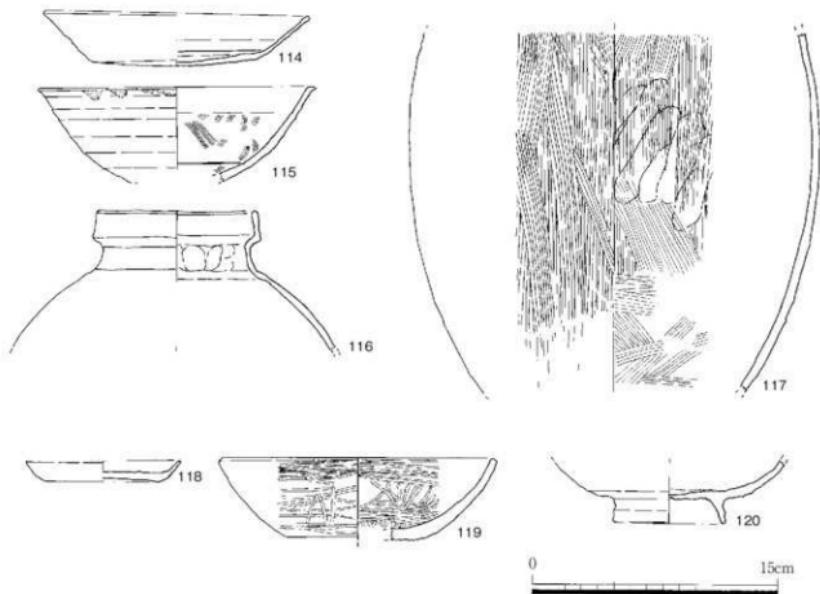


Fig. 20 整地層出土遺物実測図2 (1/3)

表1 出土鉄器・銅錢一覧 (図はFig. 25)

番号	出土地点	種類	器種等
1	第1～2面上層	鉄器	円錐形
2	SX131	鉄器	槍頭か
3	SX131	鉄器	刀子
4	(②層 黄灰色粘土)	鉄器	鏟
5	(②層40 (下層暗灰色砂))	銅器	銅鏡か
6	第2～3面褐色砂層中	銅錢	皇朝十二銭「乾元大寶」
7	SX101周辺上部検出面	銅錢	景祐元寶 (1034)

(Fig. 11-7) から出土している。

#### 土錘 (175～179)

土錘は5個体が出土した、178は表土からであるが、他は②層の中世包含層から出土した。

は径4 mmと小さい。突出した單弁、間弁は単独の紡錘形をなす。層位からも10～11世紀代の可能性が高い。170は217型式、171は656型式、172は磚である。173は斜格子と釣り針状の文様のタタキが施され、174は格子文のタタキである。174は火熱を受け赤変している。中世の瓦当は既述のSX105

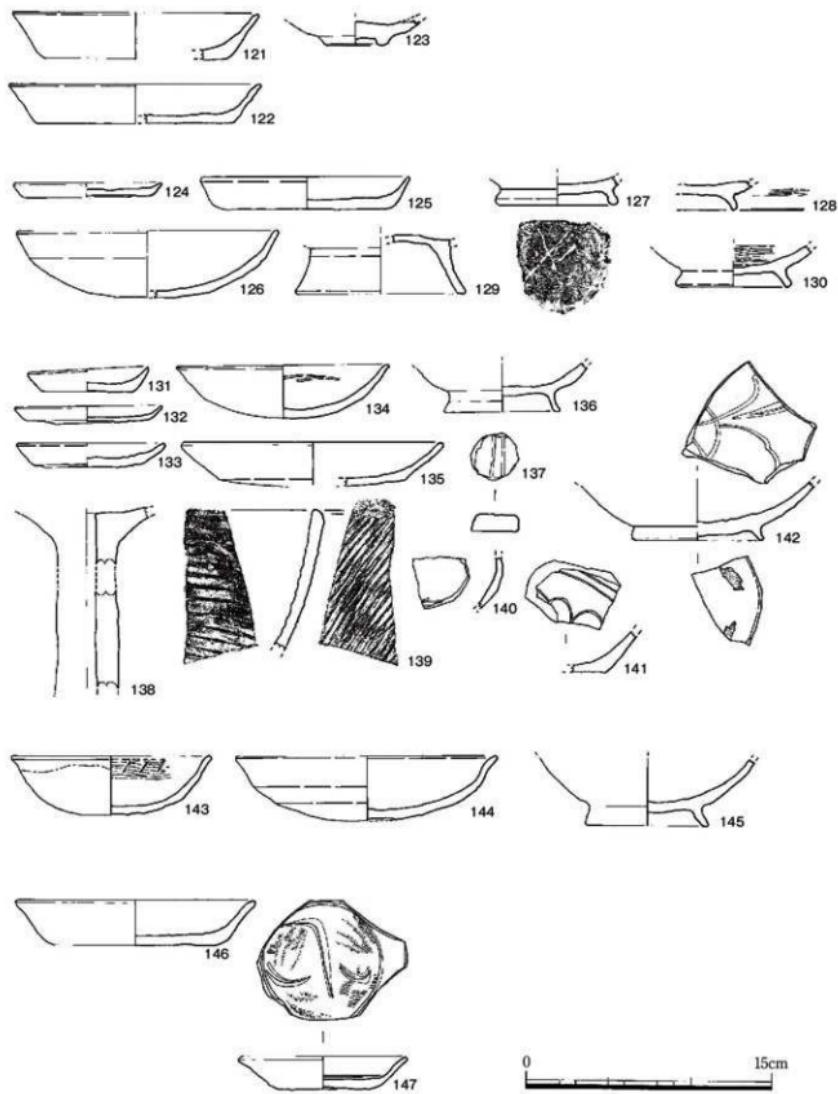


Fig. 21 整地層出土遺物実測図3 (1/3)

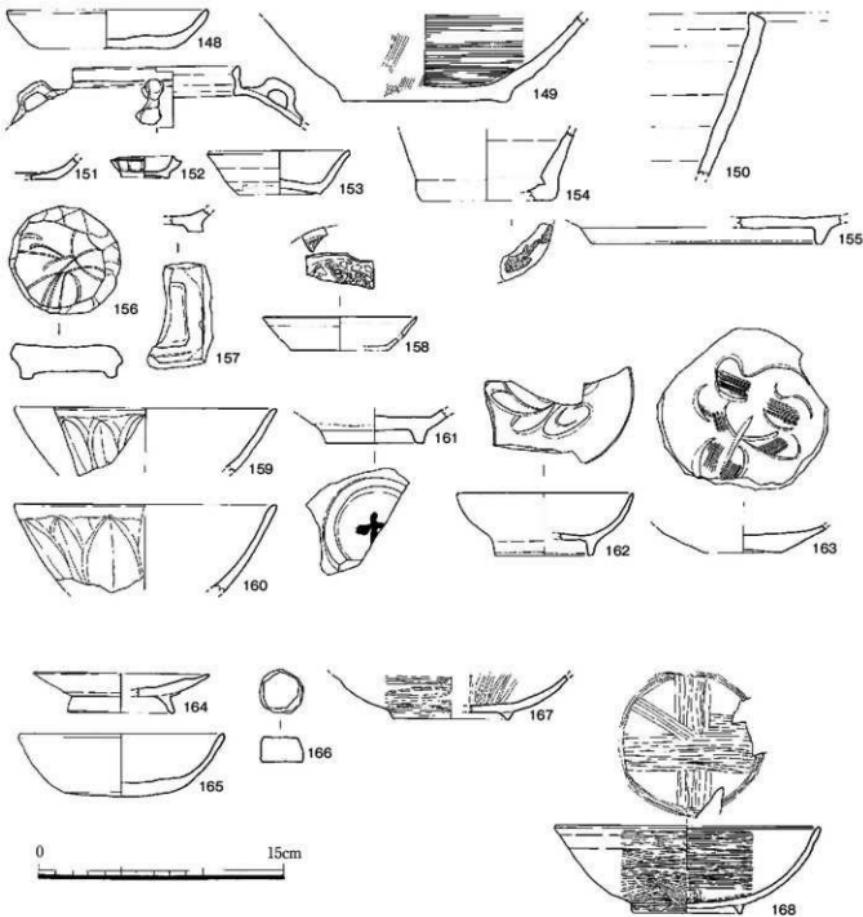


Fig.22 整地層出土遺物実測図 4 (1/3)

### 金属器

出土地点と器種についてはp-18の表に掲載する。1～4が鉄器、5は銅製品である。1は用途不明の鉄器である。笠形の形状をなす。4はX線にて鋸歯の形状が判明した。5は薄い球状の銅鈴か。

### 銅鏡

6は天徳二年（958）鋳造の軋元大寶である。径20mm。7の景祐元寶は径24mmである。

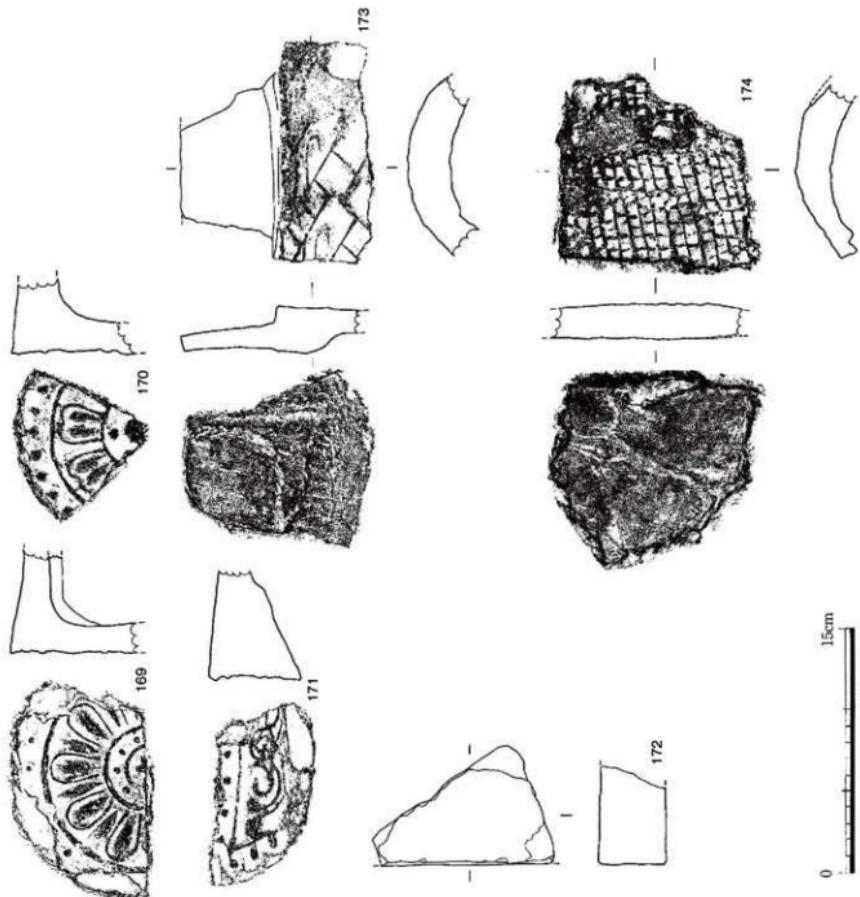


Fig. 23 出土瓦実測図 (1/3)

貝(SX74)  
第3面への掘り下げ中に検出した。層位的には中世包含層である②層の黒色シルト中になる。  
(Ph. 6) 調査区東側のSX74 (Fig. 7)とした範囲で出土したが、掘方は不明である。貝の同定は未作業  
であるので、機会を得て示したい。

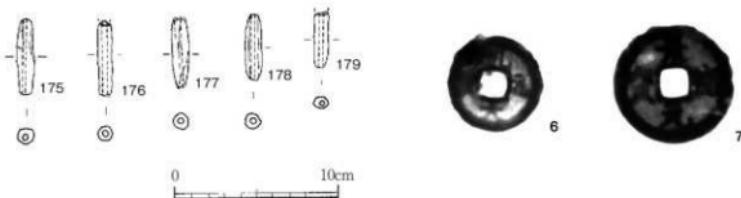


Fig. 24 出土土錘実測図 (1/3)

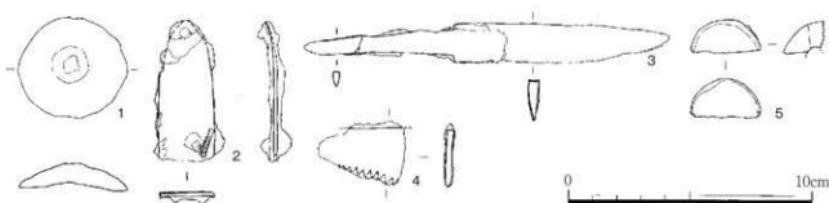


Fig. 25 出土金属器実測図 (1/2)

#### IV おわりに

##### 1. 時期と遺構

第1面で検出した石室のSX01、02からは時期を示す遺物が出土しなかった。しかし、掘り込んだ整地層と同じ層位と考えられる①層からは15世紀代の遺物が出土していることから、それ以降の構築と考えられる。また、同じく第1面から検出した灰白色粘土を貼った土壤も中世後半期以降とみられる。この第1面には①層がほとんど残らず、層位的には大半が②層の上面ということになる。②層の直上には遺構が検出されず、遺物もほとんど出土しない明褐色土が堆積し、②層が削平、整地されていることが判る。その時期は近世以降であろう。従って、第1面で検出された遺構は上部が削平され、上記の灰白粘土を貼った溝状の遺構も底面近くのみ遺存している。西側では削平されて柱穴内の根石が露呈した柱筋が検出された。その方向が調査区西側の現在の通りに平行していることが留意される。

第2面は②層中から掘りこまれた遺構の下部と考えられ、11世紀中頃から遺物が多くなり、主な遺構として14世紀初頭のSE119、12世紀中頃のSX04が挙げられる。

地山の砂丘砂直上の第3面では上層の掘り残し分の遺構検出と考えられるが、その上層の③層からは既述したように出土遺物中には11世紀代のほか、10世紀に遡る可能性があるものも少数ながら含まれる。

また、瓦は10~11世紀代の大宰府出土と同タイプの瓦当のほか、174のような特殊な軒丸瓦も出土した。周辺の調査でも瓦当の出土が多く、71次では10世紀代の可能性がある梵鐘鑄造遺構も検出されている。菩薩宮とともに創建された神宮寺との関連も示唆される。

##### 2. 調査方法と遺構面について

III-2の基本層序の項で既述したように、既往の調査では中世包含層②層を重機で剥ぎ取り第3面から調査を始め、中世後半期の遺構を消失したり、重要な遺物を失った可能性がある事例がある。今後は、第1面での検出と人力による②層の剥ぎ取りが極めて必要である。



Ph.1 SX01完掘状況（東から）



Ph.2 SX01完掘状況（北から）



Ph.3 SX02完掘状況（南から）



Ph.4 SX04遺物出土状況（東から）



Ph.5 調査区東壁土層 (Fig. 10 D-D' 西から)



Ph.6 SX74貝類出土状況



Ph.7 調査区北東隅土層（黒色土が中世包含層 西から）



Ph.8 調査区東部第3面（西から）

図版2



Ph.9 調査区中央部第3面（東から）



Ph.10 SE119内SE154検出状況（南から）



Ph.11 上部SD100、下部SE119土層 (Fig.4 B-B')



Ph.12 SD100、SE119、154土層



Ph.13 SD170完掘状況（西から）



Ph.14 調査区中央部の南北土層



Ph.15 調査区西部第3面（東から）



Ph.16 調査区北壁土層 (SD170)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	はこざき52						
書名	箱崎52						
副書名	箱崎遺跡第70次調査報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1342集						
編著者名	荒牧宏行						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667						
発行年月日	2018年3月26日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	発掘期間	発掘面 積m <sup>2</sup>	発掘原因
博多遺跡群 <small>はくた いせきぐん</small>	福岡県福岡市東区 箱崎 1 丁目 2045 番 5、2045番6	40130	022639	33°36'51"	130°25'32" 20140414 ～ 20140613	116	共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
箱崎遺跡 第70次	町屋	古代～ 中世	井戸、溝、掘立柱建物、 土塁、石室	陶磁器、土師器、瓦			
要 約	筥崎宮の北東部に位置する。4面の調査を行った。第1面からは15世紀以降の石積みの構造遺構2基、灰白色粘土を貼った溝状遺構が検出された。第2面は総じて11世紀～14世紀初頭までを含む中世の包含層（整地層）中となるが、12世紀中頃の土師皿、环の集積遺構などが検出された。第3面、4面には古代～中世前半（10～11世紀代）の遺構・遺物が多くなる。瓦当も出土し、筥崎宮、神宮寺の領域を考えていく資料も得られた。						

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1342集

## 箱崎 52

### — 箱崎遺跡第70次調査報告 —

2018年（平成30年）3月26日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1  
印 刷 魚住印刷  
福岡市博多区大博町8-20

